

5.学級への部分的な授業復帰

学習支援の教師の力で実現する

- 漢字や単語の5問テストなど、工夫して学級での学習と同じ内容を学び、できるようにさせる
- 「できる」ことで自己効力感や自信が獲得され、次のステージに進んでみようかと意欲が湧く
- 学習支援での信頼関係を構築した教科担任が学級での学習状況を伝え、学級での授業復帰を子どもとシミュレーションする

学級復帰

級友の力で実現する

- サポートグループの級友とおしゃべりやゲームに心から興じることができるようになると、関係の深まりにつれ自身の応答性に効力感を獲得する
- その仲間関係の中で級友に誘われ、さらに学習に一定の自信が回復されていると、学級復帰が叶う

学級復帰するとリバウンドする場合

個別支援で発達障害傾向が把握された

- 集団でのざわつきへの感覚過敏がみられる場合
- 集団への苦手感を訴える場合
- 学習に遅れがみられる場合
- 学習能力に損傷や凸凹がみられる場合

発達検査や就学指導を検討しましょう

思春期は精神疾患の好発年齢

精神疾患の好発年齢は14歳ころから

思春期は、身体的成長と精神的成長の非同時性でホルモンが乱れ、心身のバランスを崩しやすい

変調を感じたら、受診紹介も視野に入れましょう

学級への部分復帰での留意点

- 学び支援教室への登校が定着し、学級への部分復帰が計画され、それに乗れない本人への叱咤激励が負担で不登校を選択した生徒も存在している
- 教師は「集団に慣れてほしい」と願っているが、発達障害や学級での人間関係など本質的な問題に手当てされず対症療法が行われていると集団適応は叶わない
- 集団との関係に対する限界がアセスメントされている場合は、学び支援教室での堅牢な支援計画を立てる

安全基地とは人のことです

- 学齢期の発達課題は、学校生活の積み上げによる仲間形成と学力・勤勉性の獲得
- これが脅かされた場合、自他比較などで不安が増大すると、逃避、身体化、退行などの防衛機制が発動され、不安の制御のために安全基地を求める
- 適応の危機を迎えた時、学校に安全基地が得られないと退行し家庭にこもる
- 学び支援教室が安全基地になるためには、担当者の子供理解に基づく信頼関係構築が必須である